

抽象事象領域の コミュニケーション

玉木 悠二 (たまき ゆうじ) SEF コミュニケーション研究会



この連載では、よりよい人間社会を実現するために、コミュニケーションのあり方を考えていく。今回は、「不立文字」領域のポテンシャルの成り立ちから抽象事象領域のコミュニケーションとは何かについて考察する。

今、日本は個の世界である。

個だけの世界であるから、そこでは公という発想や国家という認識でのまとまりも希薄である。その原因の一つは、公的な立場にある人達が余り信用できないということにあるように思われる。政治家も裁判官も弁護士も官僚も企業の経営者も昔は聖職と呼ばれた教師も、公に対するより自己利益を優先させて行動する存在だと思われていることが背景にある。

そして、このような個だけの、まとまりのない現状を改善するためには、まず、公が信用を取り戻すこと、次に、個に倫理観を植え付けることが何よりも大切なことのように思われる。公が信用を取り戻すには、公が自らの責任を明確に知ること、責任と権限は表裏一体であるから、大きな権限を持つ人ほど、影響力の大きい人ほどそこには厳密に責任を果たす義務が生じ、個に求めていく以上の倫理観やノブレスオブリージュ (Noblesse oblige : 財産、権力、社会的地位に伴う責任) が必要になってくるのであろう。

第2次世界大戦の責任すら明確にできない、そのような曖昧さを好都合と思う人達の多い環境が、再び立場を乱用して自己中心的で結果責任を負わない勢力の伸張を許すのではないかと

いう懸念になって、日本の国体形成に対する真面目な努力まで押し潰し、愛国心や国家への忠誠心の醸成を困難にしているように思われる。

このような状況の中では、憲法改正などといふ議論は時期尚早で、改正が可能になるとすれば、それは公が信用を取り戻し、その証が立てられてからの話ということになるのであろう。

一方、一般市民の領域では、親が子を、子が親を殺め、いじめや学級崩壊、学力低下、二十一の増加など、他律的な対策だけでは解決できない諸問題が発生し、親も子も周囲もこれを防ぐ手立てを見出せないままに、事態はますます深刻化してきている。このような状態に対処するためには、「誰がそうさせたか」といった他責的な発想を起点とした対策や、すべてを法律で縛る対応では限界があり、個々人が自らの認識で善悪当否を見定めて行動する自律の対応、具体的には自らに厳しく他人には優しい行動規範を持つことが必要だと考えられる。

他方、技術の世界でも、現場現物を忘れ、目先の利益だけを追い求める風潮の中で、物づくりの原点を体得した多くの技術者が現場を去り、最近は、それに積年の使用で疲弊した生産設備、団塊世代の退職による熟練技術者不足が追い討ちをかけて、物づくり日本の先行きを不安にしている。

経年劣化の問題も、どこがどのように劣化しているかの評価や、そこで必要となる対応が後手に回り、ついには解決しようにも何をどのよ



図1 マニュアル化社会

うにすればよいのかわからなくなってしまった状態をそのように表現しているのに過ぎない。設備の設計者も、設備を建設する者も、それを使って製品を得、販売する者も、そこで必要となる知識の源泉はすべて現場にあるのにもかかわらず、各担当は自分の持ち場に必要な知識だけを表面的にマニュアル化して理解するだけで、由来する根源にまで理解を深めようとせず、事態の深刻さに気づくのを遅らせてしまったところにこの問題の根深さがある。

最近では、電気製品などの修理も「どこがどのように悪いのか」を調べもせずに、ただマニュアル通りにユニット一式で交換することが当たり前になり、数十、数百の構成部品の1個が壊れただけで、残りの健全な部品のすべてと一緒に廃棄して、消費者にその代金や廃棄費用を負担させている。

いつのころだったか忘れたが、「昔中国の偉い先生が弟子に『星の数を数えなさい』と言ったら、件の弟子は『それは○○の本に○個と書いてあります』と答えた…」という話を聞いたことがある。このようなマニュアル崇拝の歴史は相当に古いのかも知れない。先生は多分弟子に、星にもいろいろな色や大きさなどがあり、それをどのように仕分けしたり整理したりすればよいのかなどを、現物と対面する中で考えさせ、判断力や解決力を身に付けさせようと思われたのだと思うが、今、遭遇している諸問題もこのように文字では書き表すことができない理解

力や判断力、創造力に対する認識不足が原因になっているように思われる(図1)。

このような文字では言い表せない「不立文字(ふりゅうもんじ)」の領域のポテンシャルを、どのように認識し、維持伝承していくかは、技術、人文の分野を問わず重要な問題であり、最近言われている「技術の伝承」の問題も、このような技術ポテンシャルの特性を十分に理解しないまま、直ちに利益につながるマニュアルだけに注目し、その奥にある根源的なポテンシャルの重さや育成に要する費用、時間を定量的に理解せずに軽視してきた結果を他責事のように表現しているだけに思われる。

古来、わが国ではこの「不立文字」領域のポテンシャルについては、技術領域における伊勢神宮の式年遷宮、文化領域での禅の只管打坐

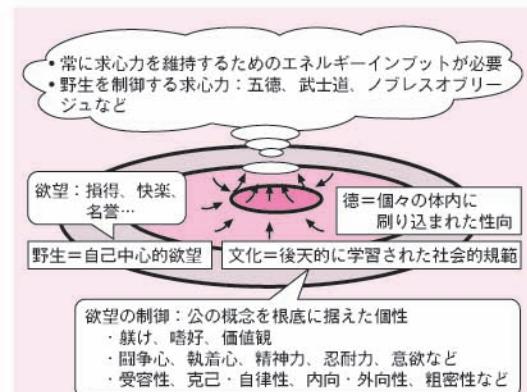


図2 人文世界の観念構成



図3 技術世界の暗黙知構成

(しかんたざ)などを引き合いに出すまでもなく、その伝承には真剣に工夫が凝らされてきた。それが軽視されるようになった現在、その不足を、近来、とみに発展を遂げたコミュニケーション技術で補う可能性を探るべく、「不立文字」領域のポテンシャルの成り立ちを図にしてみたのが次項に示すモデルである(図2、図3)。

暗黙値のモデル化

倫理観や徳などという価値観や、技術における暗黙知レベルの事項について議論をする場合は、人の好みや性向、能力に依存するところが大きい。その状態を客観的に定量化して評価し議論することができ難いため、その間の理解を共有することが非常に難しくなっている。

そこで、価値観や暗黙知一本當はその奥にあるポテンシャルを言いたいのだが適當な言葉がないので、暗黙知で代表させることにする—がどのような成り立ちになっているかを想定してみたのが次の図2、図3に示す「人文の世界」と「技術の世界」における暗黙値の構成モデルである。そして、この二つのモデルが示すところによれば、「人文の世界」では、そのポテンシャルは倫理観や我欲などの認識を求心力とした構図の中で展開されているのに対し、「技術の世界」は、対象とする技術領域ごとに固有の世界があり、その中心には洞察力や発想力、忍耐力などの能力が共通的に存在しているように思われる。

また、「人文の世界」のモデルは、それを各個の心状を示すモデルとも、その集合体である人間社会全体を示すモデルとも見ることができるが、そのまま集積すれば、無限に拡散する人間社会全体の心状を調和的に集約させているのが、倫理観などの求心力であろうかと考えられる。

「人文の世界」の特徴

まず「人文の世界」であるが、この世界である価値観を成立させようとするときには、その

価値観は個々が持つ固有の野生（属性）への制約としてかかわってくるので、そこでは必然的に、その属性に制約を加えようとする側と、それを排除しようとする側との間で自己中心的な議論が噴出することになる。

そのために「人文の世界」にある種の方向性を持たせようとするときには、そこに各個が自己犠牲をも容認するほどの—その限度は人によって変るであろうが—共通の価値観、美学のようなものを持ち込むとともに、ある意味では個の属性に逆らう方向の価値観に個を導き維持するため絶え間ないエネルギーの注入が必要になってくる。その価値観、美学が、過去においては、儒教であったり武士道であったり、ノブレスオブリージュであったり—いわゆる見識と呼ばれるものであったように思われる。

禅の求めるところでいうと、求める心状は個が持つ野生を根源にまで遡った真実世界、個々が自らをあからさまにし、取捨し納得して最後に感得した心の風景で、その追究は寄せ集めでは無秩序に広がる個の野生の中に共通性を見出し、誰もが納得する人間社会の基盤認識に求心させていくプロセスであり、我欲を抑えた自覚を促していく試行であるように考えられる。

本来「人文の世界」においても、許すべきこと、許さざるべきこと、あるべきこと、あるべきからざることなどについてのキチッとした認識があり、それに基づいて個々の意思の位置づけが明確にされるはずであるが、それが最近そうでもない雰囲気にあるのは、現在の人達の認識が何らかの原因で緩んでしまった結果ということになるのだろう。

「技術の世界」の特徴

これに対して、「技術の世界」は、奔放自在な発想が存在し得る「人文の世界」とは異なり、その論旨は前後、左右、上下の事象に対して論理的に整合の取れたものでなければならないので、新たな発想を提案しようとするときには周辺に対する奥深い理解や洞察が必要になってくる。

一般に、人の目に触れ評価の対象となる技術

はノウハウと呼ばれるレベルのものであるが、図3に示すように、その奥には「なぜそれがそうなのか」ということを解き明かしたノウハウと呼ばれる、これがないノウハウは技術的に価値がないと言ってよいほど重要な知識がある。なぜなら、ノウハウは一つの目的のために結論だけが書かれた単なる知識であるのに対し、ノウハウは行間に新しい技術を生み出す智慧が埋め込まれた知識だからである。

「技術の世界」では、このノウハウを作り出していくポテンシャル、世の中にいまだない新しいノウハウを作り出す力、さらにはそのノウハウを創造していくイノベーション力が重要で、これを持つことが技術立国日本を立ち行かせていくための絶対的な必要条件になっている。

ただ、このときに留意すべきは、このような創造力は何も鬼才天才がもたらすものだけではなく、その多くは地道な情報の収集努力と理解力、知識を組み合わせて新しい可能性を創出する発想力や洞察力の成果であり、さらに何よりも、あざかって大きいのが技術力開発のエンジンとなる忍耐力である。

技術開発では関係してくる情報の範囲が広く、しかも必要となる情報は既知か未知かを問わず、創造的活動が続く限り発生するうえに、あらかじめの情報確保もそれが多岐にわたるために限度があって、不足する情報を地道に収集する努力こそが、創造的な発想を具現化する開発行為の中の最も重要な作業になるからである。そして、このときに創造的発想の成功率を高め、模索段階を効率化して情報収集の負担を抑え切っていく能力がイノベーション力であり、それが不足すると新たな開発に多大の費用や期間が必要になったり、最悪の場合は目標に到達できなかったりすることになる。

そして、このイノベーション力は、現場でいろいろな業務を自ら体験することによってはじめて培われてくる洞察力や洞察力、忍耐力などの総合力であるから、それを育成するときにはそのポテンシャルの成り立ちに深い理解を持つ強力な支援者の存在が不可欠の条件になってくる。

◆ ◆ ◆

以上のことから推察すると、「不立文字」と呼ばれるものの対象は、「知識を智慧に変える」ときに人間の思考が必ず通過しなければならない閑門にかかるもので、それは既存の知識を原料として新しい次元の知識に思い至っていくエントロピー減少化のプロセス、言い換えれば、その隘路を突き抜いていくエネルギーの質と量に係わる事象ということができるようと思われる。

そして、この領域をコミュニケーション技術で支援する場合を想定すると、それは多分「知識を智慧に変える」プロセスにおける触媒的な役割を期待しての活用であり、そのときには触媒効果を効果的に引き出すために対象事象の特質を十分に見極めたうえで、それに即した工夫を巡らすことが重要にならうと思われる。このことは、特に「技術の世界」においてはコミュニケーション技術に求める機能が未知領域の成り立ちを既知化するイノベーション力の養成に必要なプロセスの擬似体験ないし、促成を期待したものであるうえに、対象となる技術も多様な固有領域にわたるために、「人文の世界」の場合以上に画期的な着想や工夫が必要になるよう思われる。

躯体蓄熱

松尾 陽 監修
(財)ヒートポンプ・
蓄熱センター
躯体蓄熱研究会出版WG 著
本体価2,600円(税別)
B5判・180頁



建物躯体を蓄熱体とする
「躯体蓄熱」に関する唯一の書籍！

建物躯体を蓄熱体として評価し、天井内や二重床スラブ内などに蓄熱する「躯体蓄熱」システムは、イニシャルコスト削減や機器設置スペース削減、躯体からの輻射効果による快適性の向上などが期待できる。

本書は躯体蓄熱システムの導入を計画する建築設備設計者の必携の書。